

表紙の三枚の絵葉書は、昭和八年に沼津港が河口に建設される以前、物資の集散する川岸港として栄えていた御成橋と永代橋の間の狩野川右岸の様子である。問屋の石蔵が建ち並び、荷物を運ぶ船が横付けした川岸の景観が、沼津の「名所絵葉書」として紹介されている。

いずれも同じ写真原稿から製作されたとみられるが、上から黒色単色印刷・青色単色印刷・着色印刷と印刷方法が違い、レイアウトや説明文も異なっている。

発行は、葉書の表面と袋の記載から、三枚とも和歌山の太正写真工芸所であったことがわかる。

上段の絵葉書は、「躍進する明光の沼津」という袋の中の一枚で、袋の裏側には「昭和拾四年拾月拾三日」のスタンプが押されている。また、下段の絵葉書は、カラー写真の技術が未発達な時代に製作されたもので、写真原稿に着色を施し、印刷されたものである。

これら二枚の絵葉書は、説明文や船のイラスト、英語表記などの共通点があり、沼津の観光が盛ん

だった時期に製作されたと考えられる。

一方、中段の絵葉書は、「沼津名勝」という袋の中の一枚で、袋の裏側に「昭和十九年九月三日」と記されている。

この袋の絵葉書には、「強い民こそたふとい資源」・「目指せ大空、世界の舞臺」・「前線と心を結ぶ奉公日」など、戦時下における国策標語が、表面の住所欄と文面欄の境界として載せられている。

さらに、紙質が悪く、英語表記もないことから、昭和十六年に始まった太平洋戦争の時期に製作されたと想定される。戦地の兵士への便りにも使われたであろう。

このように同じ写真原稿であっても、色・説明文・レイアウトなどを変化させることによって、それぞれ異なった絵葉書に仕上がっていることがうかがえる。絵葉書は、製作時の時代背景を反映させた歴史史料といえる。

〔参考文献〕若林淳之監修『写真集 静岡県の絵はがき』（一九九三年）、森川方達『帝国ニッポン標語集』（一九八九年）

シリーズ

沼津兵学校とその人材

62

牛乳販売の先駆

幕末、医学や軍事面から始まった西洋文物の導入は、やがて衣食住のレベルにまで及ぶ。沼津兵学校時代の沼津でも文明開化の先駆的現象が見られた。兵学校の教授・生徒たちには、いち早くザンギリ頭にし、洋服を着ていた者もあり、牛を共同購入しビフテキを食べていたグループもある（『蘭学の家桂川の人々 最終篇』）。

オランダ帰りの一等教授方赤松則良はヨーロッパの牧畜のようすを周囲に宣伝したらしく、江原素六や結城無二三はすっかり感化され、後に沼津や甲府で牧畜業を始めるに至る（『旧幕新撰組の結城無二三』。静岡学問所の教授杉山親（三八）は、明治五年（一八七二）に『牧牛説』という本を翻訳・出版している。

維新後、西洋式の牧畜や牛乳販売などの事業を始めた者には、江原や結城以外にも旧幕臣や佐幕派の旧藩士が目立つ。東京で最初の

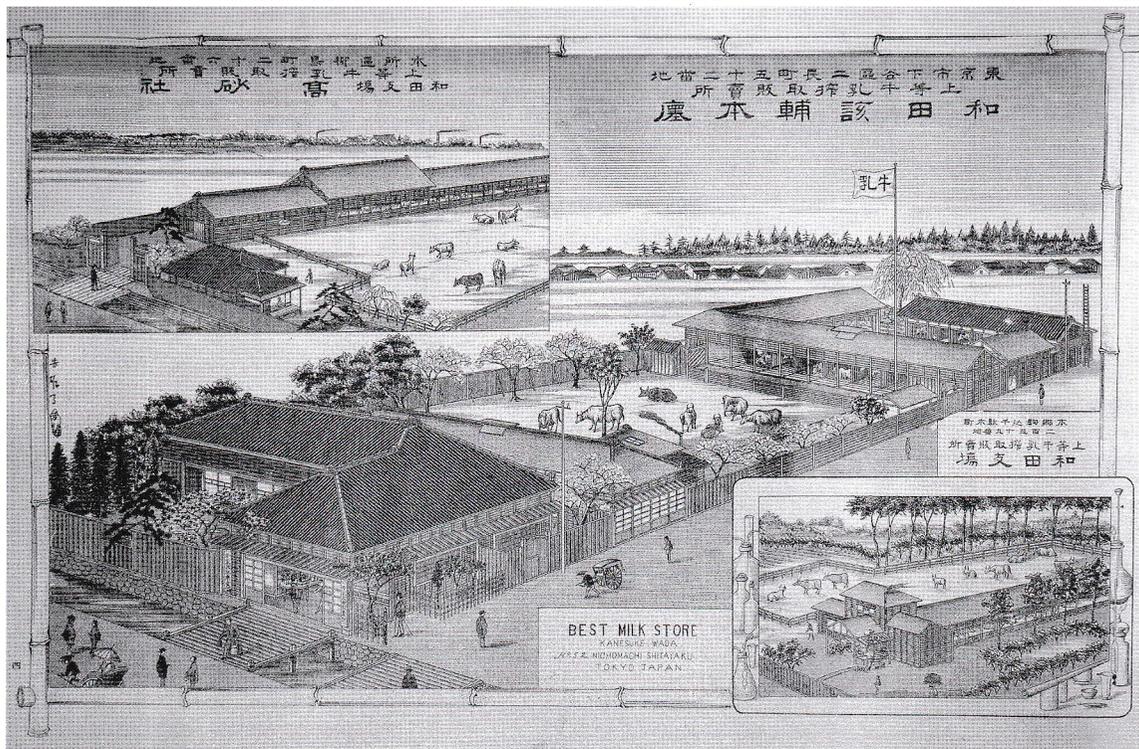
和田半次郎

牛乳屋となったのは元旗本の阪川當晴（松本順の伯父）だったし、渋沢栄一も箱根で牧場を経営した。葦山代官の元手代森田留蔵はアメリカ留学から帰国後、伊豆に牧羊を導入した。下北半島、斗南の地で牧畜を始めたのは旧会津藩士広沢安任である。維新の敗北者たる彼らは、政府の勸業政策の中枢に位置するのではなく、地域に身を置き民間の立場から新しい産業を興そうとしたのである。

実は、赤松や江原・結城以外に、沼津兵学校と牧牛とをつなぐ人物が他にもいた。

静岡藩では軍事筆生介（並）という役職にあった和田半次郎なる人物がそれである。和田は廃藩後上京し、明治から昭和戦前期にかけて東京を代表する牛乳販売店を創業することになる。

和田半次郎（文政6・1・11生まれ、明治31没）は、幕臣和田太助の養子である。和田家は徳川将



東京の和田牛乳店 (『日本博覧図』第拾貳編、明治30年刊)

軍家に代々鷹匠として仕えた同心だった。半次郎はその九代目当主。半次郎の実家は御鷹匠戸田五助家であるという。妻とく(みき)は和田家の同僚である鷹匠小川勝右衛門の長女であり、半次郎夫妻は夫婦養子であった。

幕府瓦解により駿河に移住、駿東郡小諏訪村(沼津市、後の地番では二七六番屋敷)に住んだ。そして沼津兵学校の管理部門である静岡藩軍事掛の職員となった。上司にあたる掛の最高幹部には半次郎よりもはるかに若い江原素六がいた。半次郎は沼津で数年間を送るが、その間の動向は不明である。妻の甥小川五郎作も三等勤番組として沼津に移住していた。

上京は明治六年(一八七三)六月十一日、五十一歳の時だった。小川勝右衛門の次女のぶは、前田留吉の妻となっていた。前田は、上総国の農民の子だが、幕末横浜で初めて牛乳販売を行った人物として知られ、維新後は東京で開業していた。半次郎は、この義弟にあたる前田に勧められ、畜牛や搾乳の技術を学ぶことになる。

最初は東京芝の前田の店で見習いとなった。毎朝一時に起床、牛五頭の乳を搾り、外国人の住居を回ったり、築地の海軍に納入する牛肉の運搬を担当した。そして明治八年(一八七五)九月独立し、東京下谷に自分の店を開業した。

和田牛乳店は、半次郎が跡継ぎに迎えた帝国大学出の婿該輔の経営手腕と、日本人の食習慣の西洋化にも支えられ、以後順調に発展し、東京府下有数の牛乳店となっていた。半次郎は明治十五年(一八八二)二月二十五日に隠居、三十一年(二八九八)に七十六歳で亡くなった。半次郎の曾孫には女優小暮実千代がいる。

明治五年に土族授産のため沼津で牧牛を始めた江原素六は、社員を東京に派遣して前田留吉に技術を学ばせたという。和田の上京後の進路には、前田との姻戚関係以前に、沼津での江原の存在があったとも考えられる。(樋口雄彦) (参考文献)『大日本牛乳史』(一九三四年、牛乳新聞社)、黒川鍾信『東京牛乳物語』(一九九八年、新潮社)ほか。

お知らせ欄

◎企画展「浮世絵に描かれた
東海道と沼津宿」の終了

7月14日から9月30日まで開催していた企画展「浮世絵に描かれた東海道と沼津宿」は無事終了しました。

また、企画展に合わせ、8月26日に開催した歴史講演会「東海道と沼津宿」にも、62名の受講者がありました。



▶歴史講演会の様子

◎「平和を考える親子戦争史跡めぐり」の結果

8月15日に行った「平和を考える親子戦争史跡めぐり」には、小学三年生から中学一年生までの子供とその保護者、9組20名が参加し、市内12カ所の戦争史跡を見学しました。

◎古文書解読入門講座の結果

9月から10月に5回にわたって開催した古文書解読入門講座には、31名の受講者があり、くずし字解読に取り組みました。

◎企画展「絵葉書にみる沼津の名所」の開催

身近な歴史史料である絵葉書を通じて、時代の流れとともに移り変わってきた明治・大正・昭和期の沼津を振り返ります。

期 間：平成13年12月1日(土)～

平成14年2月27日(水)

会 場：4階展示室

●絵葉書の歴史

絵葉書は、明治三十三年（一九〇〇）に郵便制度上で認められて以降、現在まで百年以上にわたり、各地の歴史をビジュアルに記録し続けてきました。

現存するものは、小さな葉書サイズながらも貴重な歴史史料といえます。

●「名所絵葉書」

沼津は、明治二十二年（一八八九）に東海道線が開通し、明治二十六年に沼津御用邸が造営されたことにより、気候温暖かつ風光明媚な観光・保養地として、全国的に有名になりました。

千本公園、千本浜・桃郷・牛臥海岸、御用邸、静浦・内浦海岸、狩野川、市街地の街並みなどが、「名所絵葉書」として、数多く紹介されています。しかしながら、これらの名所の中には、今では景観が一変してしまったところもあります。

●「記念絵葉書」

「名所絵葉書」が主流となる以前、絵葉書が広く一般に普及するきっかけとなったのは、明治三十七～三十九年（一九〇四～〇六）に発売された大きな人気を集めた日露戦争の「記念絵葉書」でした。以後、各種記念行事の際には、この種の絵葉書が盛んに作られました。

●「事件絵葉書」

事件を伝えた「事件絵葉書」は、撮影した写真を即時に印刷して販売することにより、テレビや雑誌が普及していなかった時代、早く手に入る報道写真として、重要なメディアの役割を果たしました。

◎企画展図録「絵葉書にみる沼津の名所」の刊行

企画展の図録を刊行します。絵葉書一六二点と、当館絵葉書目録を収録しました。

規 格：B5版・72ページ（内カバー14ページ）

価 値：五〇〇円

◎年末年始の休館

12月29日(土)～1月3日(休)は、年末年始の休館日です。また、12月28日(金)は、月末休館日となります。

沼津市明治史料館通信 第67号

編集 沼津市明治史料館

発行 沼津市明治史料館

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二-1

電話 〇五五九-二三-三三三五

FAX 〇五五九-二五-三〇一八

http://www.city.numazu.shizuoka.jp/sisetu/meiji/index.htm

jp/sisetu/meiji/index.htm